

公衆衛生関係 (県 内)

島根県健康指標データベースシステムの機能活用から見える島根県の自死の現状

小室俊子・大城 等・岩谷直子

第 54 回島根県保健福祉環境研究発表会 (平成 25 年 7 月 12 日 : 松江市)

I はじめに

島根県の自死者数は 1996 年～2009 年まで年間 200 人を超え、死亡率 (人口 10 万対) も全国上位で推移、2010 年には 184 人に減少したが、依然として全国より高い死亡率が続いている。そこで、島根県健康指標データベースシステム* (以下「SHIDS」という) の新規搭載機能を活用し、死亡率など従来の健康指標だけでなく集団としての損失という視点で島根県の自死の現状を分析した。

II 方法

SHIDS に蓄積した 1983 年～2011 年の人口動態統計の死因別・性・年齢階級別死亡数、国勢調査人口及び毎年 10 月 1 日現在の性・年齢階級別推計人口、全国の死因別・性・年齢階級別死亡率のデータ等を使用し、SHIDS 搭載の各種健康指標計算システムを稼働させ、死亡数・粗死亡率・平均寿命・PYLL (早死損失年) ・超過死亡等を経年的に算出した。

III 結果及び考察

1. 2007 年～2011 年の 5 年間の自死者数は男性 766 人、女性 272 人で、総死亡に占める割合や死因順位は男性が高く、男性の死亡率は全国と比較しても高かった。10 代～30 代の男女と 40 代男性で死因の 1 位で、この年代は死亡自体が少ないため死亡に占める割合は高く、特に 20 代男性では 5 割以上を自死が占めていた。
2. 65 歳 PYLL は、65 歳に達する以前の死亡によって損失した生存年数の合計で若い年代の死亡が影響する指標である。2009 年の島根県男性の自死の PYLL は 9.1 年 (人口千対) で、自死より死亡数や死亡率が高いがんや心疾患、10 代～30 代男性の死因 2 位の不慮の事故と比べても 1.5 倍～数倍高かった。また、全国と比較しても高く、自死が島根県男性という集団に与える損失は非常に大きいと言える。
3. 2009 年を中心とする 5 年平均の平均寿命は男性 79.65 年、女性 87.12 年で、仮に自死が 0 になると男性の平均寿命は 80.67 年、女性が 87.48 年で、男性は 1.02 年の伸びが期待できた。自死を 0 にすることで県健康増進計画 (第二次) の目標の男性の平均寿命 79.95 年も達成できることになる。
4. 超過死亡は、全国の死亡率をもとに算出した期待死亡数と実際の死亡 (= 観察死亡数) の差で、全国に比べ島根県の自死者数がどれだけ超過であるかを示している。島根県の主要死因であるがん、心疾患、脳血管疾患では男女とも期待死亡数より観察死亡数が少なく推移しているが、自死は 1985 年以降継続して年 16～58 人の超過死亡が発生し、この 25 年間の超過死亡を累積すると 1,000 人を上回る超過死亡が発生したことになった。この期間の男女計の超過死亡のうち男性の超過死亡が 8～9 割を占め、2009 年の男性の超過死亡の年代別割合は 40 代が最も多く 2 割を占め、年代別割合の推移をみると 50～60 代は減少したが、20～40 代は横ばいか増加傾向だった。

IV まとめ

自死が島根県の健康課題であることはこれまでも認知されているが、今回の結果から島根県という集団にとって自死は非常に大きな損失をもたらすものであることが改めて分かった。なかでも男性と 20～40 代の若い年代に課題があるため今後も継続してモニタリングしていきたい。

*) 統一形式で収集した死亡や人口データ等を用い、誰でも簡単正確に各種健康指標を算出できるようにした本県開発のシステム